

環境にやさしい「エコライフ」や「ごみ問題」を学ぶ啓発施設「えこはま」

特定非営利活動法人エコライフはままつ たかね みほ
理事 事務局長 高根 美保

浜松市民が「もやす前にもう一度ごみについて考える」総合的な拠点として市民による市民のための施設づくりを実現しています。それが、えこはまです。

浜松市と民間企業・市民団体が連携

「浜松市西部清掃工場（トップ写真）」の運営管理を行うJFE環境テクノロジー(株)の再委託で、市民団体NPO法人エコライフはままつが、「環境啓発施設 えこはま」を活用したごみ減量に関わる啓発活動の企画立案を担い、実施しています。

NPO 会員による工場見学案内

家庭から出されたもえるごみが、清掃工場でどのように処理されているのか、DVDで視聴していただいています。また、清掃工場内をスタッフが案内し、設備や作業内容について説明します。民間企業の優れた取り組みなども説明します。持ち込まれたごみは清掃工場処理しますが、ごみを出す前に市民ができる行動がないか考えて宣言するイベントも年2回実施しています。

もったいない実践活動

環境体験学習講座を年間36回開催し、2022年度までの14年間で延べ14,200名の市民参加がありました。浴衣や古布を裂いてつくる「布ぞうり」や「リメイク」「包丁とぎ」講座など、市民が身近な行動から環境を考えるキッカケとなる講座を開催しています。また、敷地内にある公園型ビオトープ池を使った自然

観察会では、地元のミナミメダカの保全と観察だけでなく、外来生物の駆除なども子どもたちと一緒にこなしています。

2018年に浜松市が「SDGs未来都市」に選定されて以降、生物多様性講座や海洋プラスチック問題を考える講座なども開催しています。また、民間企業の協力を得て、毎年10月の「3R推進月間」に合わせてリサイクル講座「パソコンを分解してみよう」を開催し、正しい分別がリサイクルの基本であることを啓発しています。

不用品交換市（通称：もったいない市）の開催

家庭で使わなくなった衣類・本・おもちゃ・食器を譲る「もったいない市」を年6回開催しています（写真1）。



写真1：もったいない市の様子

本事業は市民に定着した事業となり、環境省令和元年度「環境教育体験活動優良事例」（2019）としても認定されました。2022年度までに全58回開催（2010年11月開始）し、参加人数26,000名、リユース量3.4トン、リユース率約94%でした。

食器市は全20回開催し（2015年1月開始）、参加人数8,900名、リユース量14.8トン、リユース率約84%でした。

リユース啓発事業

毎月第2日曜日は、壊れたおもちゃを修理する「おもちゃ病院」を開催しています。おもちゃ病院スタッフが持ち込まれたおもちゃの修理を行っており、2022年度までの修理依頼3,741点で、71%のおもちゃの修理が完了しています。また、家庭で不用になった木製家具の再使用事業では、2,529点の寄付があり、99%がリユースされました。

常設もったいないコーナー（子ども服・本・おもちゃ）は、開館時であれば常に持ち込みが可能であり、市民はいつでもリユース品を持ち帰ることができます。これまで34,000点の寄付があり、リユース率76%でした。

“もやしたら もったいない” 行動

誰もがごみ減量行動を身近なところから取り組み、SDGs活動を実践するキッカケとして、2021年度から実証実験の協働事業を立ち上げました。市民と清掃工場、日本製紙グループの協働リサイクル推進事業です。対象商品は、紙マーク（図1）のついた「使用済の紙製ヨーグルトカップ・アイスクリームカップ・紙コップ」の3種類です。ルールは「洗って・乾か



写真2：市民による紙容器持ち込み風景

して・重ねて」箱に入れることで、3年間で957.2kg（2024年1月時点）を超える回収量でした。ごみ減量にとどまらず、環境マークの学習やエシカル消費の気づき、リサイクルは正しく分けることが重要であることを市民が実践から学んでくれました（写真2）。



図1：紙マーク

2020年から開始した使用済みハブラシリサイクル事業では、4年間で269.5kgのハブラシが持ち込まれました。1本10gのごみ減量とリサイクルが促進されました。

今後について

同施設は、2024年1月31日付で15年間のPFI事業が終了。2月1日より5年間の延長運営が決定しています。市民によるごみ減量への気づきと環境行動を実践する場所として引き続き情報発信をはじめとする市民が環境問題を考える居場所づくりを目指します。